

「生きるということ」をめぐる人間学的断想

—「生きることの意味」から「いのちへの目覚め」へ—

鳶野克己

1. 「生きることの意味」への問い

「生きるとは何か」。……「なぜ生まれてきたのか」、「死ぬとはどういうことか」。

今この瞬間も私の心臓は拍動し、肺は呼吸している。諸器官はそれぞれに役割をもってこの私の生命を維持する活動を担っている。それらの活動は、私という個体が受精によって母の胎内に宿ったことを契機として始まり、今日に至るまで、長きにわたり休みなく営まれてきた。そして、いつとは定められないにせよ、必ず寿命を迎えて、永久に停止することになる。私の誕生が受精という出来事によること、私の生命は心肺の活動なしには不可能であること、死はそうした生命活動の不可逆的な永久の停止であること、これらは「私が生きていること」の根幹にかかわる動かし難い峻厳な事実である。

こうした事実を生物学的な生命活動という観点から把握する生命科学研究の成果に裏づけられた生理学的・医学的知見に基づいて、「生きること」や「誕生と死」を成り立たせている原理的構造とでもいうべき事柄は、今日ますます詳細に解き明かされるようになってきている。しかしどれほど精密で明解な解説が提示されたとしても、その解説は、これらの問いを発する私の思いとは、最も基本的なところで如何ともし難く響きあわないであろう。これらの問いは、自身が「今ここにこうして生きていること」を、自然科学的視点から客観的に捉えられる生命活動として位置づけ、その機制や機能や因果を究明しようとする類いの問いではないからである。

「生きるとは何か」、「なぜ生まれてきたのか」、「死ぬとはどういうことか」とは、私たちにおける「人間として生きるということ」の核心へと向けられた「意味への問い」である。だが、こうした問いに関して、それは実生活上のさまざまな困難に遭遇したとき、あるいは、人生の大きな節目や岐路となる年齢段階や時期に立ち至ったとき、その混乱と動揺のなかで往々にして湧き上がる感傷的な表白に過ぎないと退ける立場もあろう。また、そんな問いは、日々の諸課題に全力を傾注すべき生活にとって、通常、不要で無益であり、充実した人生を送る上で、しばしば有害でさえあると評する見地もあろう。さらには、それはどこに向かって何を求めているのか皆目定かでないような問いであり、そのような詮無き事柄に拘泥しては生きていけないと断じられることもあろう。

しかし、「生きるとは何か」を考え、「生きることの意味」を問うことは、果たして人間という生きものにとって、偶々の難事に面して、あるいは誕生から死に至る歩みにおける特定の一時期に、いわば取り憑かれるようにして現れてくる一過的で表層的な営みであろうか。私たちにとって「生きるということ」は、問うても答えようがない詮無き事柄などに拘泥せず、日々の生活における現実的で具体的な必要性や有用性や有益性といった明確な尺度で測られるような「人生の充実」を求めることに尽きるのであろうか。

「人間として生きるということ」にかかわる出来事の具体的な「現場」に臨み、その「現場」で発

せられる多様な「声」に耳を澄ますことを通じて、「生きることの意味」をめぐる襞の深い、肌理の細やかな思考を提示し続ける臨床哲学者鷺田清一は、『死なないでいる理由』というエッセイ集で、何かの活動をしながら、その活動をすることが、自身の「生きるということ」にとってもちうる根本的な意味を考えてしまう人間という奇妙な生きもののやっかいな生き方を次のように語る。

「わたしたちは、いうまでもなく生きものです。昆虫や哺乳類や魚、草木などと同じように、生きものとして存在します。けれども、人間は奇妙な生きもので、ただ生きるだけでは満足しないところがあります。何かをしながら、その何かをすることの意味を考えずにはいられない。掃除や洗濯をしても、「じぶんのやっていることにどんな意味があるんだろう」「毎日毎日、同じことをくりかえすことに何の意味があるんだろう」なんて、つい考えてしまう。そういうように、考えずにはいられない奇妙な生きもの——それが人間です」（鷺田 2002：222）。

「意味への問い」は、「掃除」や「洗濯」といった日々の慣れ親しい営みのまさしく最中にも頭をもたげてくるのである。部屋に掃除機をかけながら、洗濯機を回しながら、私たちはふと「いったい何をしているんだろう」と首をかしげる。むろん、掃除機と洗濯機が何であるのかわからなくなったわけではない。掃除機は賢く掃除するし、洗濯機は懸命に洗濯する。私たちはそれを知っている。掃除機も洗濯機も馴染み深いいわゆる家電製品である。そして、「掃除」や「洗濯」の意味を改めて問われるなら、生活における必要性や有用性や有益性という視点に立って、例えば、「住居や衣服の清潔や衛生のため」、「快適で心地よい毎日のため」、ひいては「健康で文化的な生活を過ごしていくため」といった、直截で明解ではあるが何とも無味乾燥な解答がなされるまでであろう。

だが、いうまでもなく、掃除や洗濯をしつつ、「こんなことにいったい何の意味があるのか」と考え始めるなかで発せられる問いは、そうした水準の解答では毛頭収まりがつかない問いである。掃除をし、洗濯をするということに象徴されるような営みによって成り立っている生活の総体、さらにはそうした生活の総体を現にこうして生きているという、私たちの「人間として生きるということ」それ自体の意味がここでは根本から問いに付されるのである。

「掃除する」、「洗濯する」、日々の生活のそんな茶飯事までいちいち意味を問うなど愚かなことではないか。「生きるということ」そのものへの根本的な問いと結びつけて、「掃除」や「洗濯」に何の意味があるのかなどとことさら問わなくても、掃除の行き届いた居心地のよい家に住み、洗い立ての清潔な衣服を身につけること、それで十分ではないか。人間もまた、故なくこの世に生まれ、生まれたからにはやがて死に逝くその瞬間まで、黙々と心臓は拍動し、倦まず弛まず肺は呼吸を繰り返すという形で、ただひたすらひたむきに生き続けようとする生きものであるとすれば、こうした「生きるということ」そのものの意味を問うという営みは、確かに一面愚かなことなのかもしれない。しかし、鷺田はそのように問うことを人間が抱え込んだ「奇妙な性^{さが}」（鷺田 2002：222）だという。抱え込まれたこの問いに、もとより確答など保証されていない。問うことで日々の生活の安定がもたらされることもない。むしろこの問いのなかで、掃除機も洗濯機もますます、その馴染みの相貌が見知らぬものに変容していく。確答は保証されない、安定ももたらさない、問うほどに、日々の生活の基盤は揺らぎ、その輪郭もぼやけてくる。にもかかわらず、私たちは問うことをやめない。やめることができない。やめると、自分がもはや人間として生きてはいないように思われてくる。「性」の「性」たる所以であろう。

小論は、鷺田とともに、こうした「何かをしながら、その何かをすることの意味を考えずにはいられないということ」、より原理的には「生きながら、その生きていることの意味を問わずにはいられないということ」を、人間の「性」と捉える立場に立って進められる。すなわち、私たちが自身の懐深く抱えこんでいる「生きることの意味」への抑え難い関心、生きもの一般からすればすこぶる奇妙な、しかし同時に人間としては極めて切実なこうした関心に基づき、「生きるということ」の根源へ向かおうとする考究である。この考究はその深まりのなかで、「生きるということ」における「いのち」の次元に逢着することになるであろう。

考究は、上田閑照が、自著の「あとがき」で、「生きるということ」をめぐって「人間が生涯を過ごすということ」を問うた一文を取り上げることから始められる。

2. 「一人の人間がこの地上で何十年かの生涯を過ごすということ」

京都学派において脈々と育まれ培われた「思索と体験」をめぐる豊穡な学統を生き活きと受け継ぎ、ドイツ神秘主義、禅仏教、西田哲学を中心とした研究領域で、独自の深みを湛えた人間学的な問題圏を切り開いた宗教哲学者上田閑照は、著書『西田幾多郎 - 人間の生涯ということ -』¹⁾の「あとがき」を次のように書き起こしている。

「一人の人間がこの地上で何十年かの生涯を過ごすということは、一体どのようなことであろうか。いつの頃からか、この問いが、静かに、しかしはっきり問いとして感じられるようになりました」(上田 1995:249)。

上田は、この「あとがき」で、自らの停年退職を題材にした西田の仮構の小品「或教授の退職の辞」を随分前に読み、爾来しばしば誘われるようにして読み返すうちに、それが語りかけてくるものに動かされて、『西田幾多郎 - 人間の生涯ということ -』を著したと語る²⁾。そして、冒頭の問いを承ける形で、この小品に描かれた、また現にそのように生きた西田の生涯から、「人間としてこの世に生きるということがどういうことかを繰り返し思わずにはいられませんでした」(上田 1995:249)と述懐するのである。

上田はまた、「一人の人間の生と死に触れて、生きるとはどういうことかをそこから学ぶ」(上田 1995:1)ということがあるとし、表題を『西田幾多郎 - 人間の生涯ということ -』としたことの趣旨を次のように説明する。すなわち、上田にとって、「生涯」という言葉にことに大きな意味が感じられるようになったのは、この「或教授の退職の辞」における西田の「生涯を語る」文章に触れてからだと述べる。そして、読み深めるなかで、「それまでもよく知っていた「生涯」という言葉が自分の身に響くような形で大きな言葉になってきました」(上田 1995:8)とし、西田の伝記的事実はその都度手がかりにするので、一種の伝記ないし評伝という意味もないではないが、伝記を書くのではなく、「西田の生涯に触れて、人間として生きるということがどういうことなのかを省察したい」(上田 1995:8)というのである。

表題に「人間の生涯ということ」という文言を添えた意図をこのように説明した後、上田は文字通り「人間の生涯ということ」と名づけられたこの著書の第1章で、「或教授の退職の辞」のほぼ全

文を紹介する。そして、作品の構成と内容の諸特徴を指摘しつつ、この作品が「人間として生きるということ」をめぐる言い表そうとするものを、詳細に分析説明していくのである。

「生涯」という、人間の生きるあり方を捉える言葉に上田が思いを深める機縁となった西田の「或教授の退職の辞」の要点を以下に示したのち、「西田の生涯」から「人間の生涯」へと向かう上田の眼差しの人間学的性格について考えてみる。

或停年教授の退職慰労会における当の教授の挨拶を耳にした給仕の話を書き留めたものらしいという前置きの一文によって、三つの段落からなるこの小品は始まる。こうしたその場に給仕として偶々居合わせた人物の話の聞き書きといった設定のもと、西田は、西田その人にほかならない一人の退職教授を登場させ、その教授に仮託して自身の生涯を語るのだが、その語りは以下のような迂路を辿ることになる。すなわち、最初の段落では、語り手は給仕である第三者であり、慰労会の様子はその第三者の視点から客観的に描写されていく。退職教授も、この段落の文中で、「彼」という三人称をもって呼ばれる。宴の料理がデザートに入った頃、進行役らしい同僚教授からの明晰な口調による慰労の辞を承けて、退職教授である彼は「立って何だか謝辞らしいことを述べたが、口籠ってよく分らなかった」(西田 1979b:168)³⁾という具合に、第三者の視点から描かれるのである。そして、正式な宴のひとつも終わり、参加者が総じて打ち寛いだ頃、退職教授は、先ほどの謝辞があまりに簡単で済まなかったとでも思ったか、再び立って彼の生涯の回顧らしいことを話し始めたという文章の流れになっていく。ここで段落が変わり、ここまで「彼」として三人称で描かれてきた退職教授は、突如「私」となり、一人称へと変換転調して自らを語り出すのである。

西田は、退職教授の口を借りる体裁をとりつつ、一人称の「私」として、まず、次のように切り出す。「回顧すれば、私の生涯は極めて簡単なものであった。その前半は黒板を前にして坐した、その後半は黒板を後にして立った。黒板に向って一回転をなしたと云えば、それで私の伝記は尽きるのである」(西田 1979b:169)。だが、一旦はそのように、「黒板に向って一回転をなした」で「私の伝記は尽きる」としながらも、「併し明日ストーヴに焼べられる一本の草にも、それ相応の来歴があり、思出がなければならぬ。平凡なる私の如きものも六十年の生涯を回顧して、転た水の流と人の行末という如き感慨に堪えない」(西田 1979b:169)と言い継ぐ。そして、「北国の一寒村」に生まれて以来、少年期青年期の多感な日々から学を修めて高等学校と大学で教壇に立ち停年を迎える日までの「私」の歩みが振り返られていく。最後に、近来はしばしば、家庭の不幸に見舞われて心身ともに銷磨したことに触れ、成すべきことも成さず、尽くすべきことも尽くさなかったことに対し、「すべての私の過去を容してもらいたい」(西田 1979b:171)と参加者の寛恕を願いつつ、終始自覚的に抑制された物言いで、静かに挨拶は終えられるのである。

ここで再び段落が変わり、語り手は第三者である給仕へと戻り、退職教授は「私」からまた「彼」へと呼び改められる。すなわち、参加者のなかには、「彼のつまらない生涯を臆面もなくくぐぐと述べ立てたのに対して、嫌気を催したものもあつたであろう、心竊に苦笑したものもあつたかも知れない」(西田 1979b:171)が、彼を囲んでその後暫く昔話が続けられるといった描写になるのである。そして、彼自身は翌日遠くへ行かねばならないとして早めに帰ることになり、多くの人々が彼を玄関に見送ったと記される。「彼は心地よげに街頭の闇の中に消え去った」(西田 1979b:171)との一文をもってこの小品は閉じられている⁴⁾。

「我々が之に於て生れ之に於て働き之に於て死にゆく世界」(西田 1979a:217)の根源へと向かうその独創的かつ包括的な思索を通じて、西田幾多郎が今日でも大きな思想的影響力をもつ近代日本

の哲学者であることは言を俟たないところである。哲学者としての彼の事績とその事績を産み出した彼固有の人生内容それ自体は、もちろん「評伝」として著されるに値する意義をもつといえる。そして、上田もまた、西田が自身の生涯を回顧した「或教授の退職の辞」を繰り返し味読するなかで、上田自身がそこに繋がる学統の祖としての「西田」という固有名をもつ一人の人物が、ある特定の社会における特定の時代に生を享け、その歴史的社会的条件のもとに、ほかの誰でもない西田個人として歩んだ人生の具体的な道筋に、いよいよ関心を深めていったのであろう。現にこの評伝で、上田は、西田が固有に歩んだ具体的足跡にしたがって章立てし、その都度直面した伝記的事実を詳細に辿りながら、深い敬意と親愛に満ちた筆致で、さながらその時その傍らにともにいたかのごとく、西田の生きた姿を活写しているのである。

しかし、上にも触れたように、上田は、そうした西田個人の固有な人生の歩みを描き出しながらも、「一人の人間がこの地上で何十年かの生涯を過ごす」という「人間の生涯」にかかわる問題圏に向けて筆を展開していく。上田によれば、「人間として生きる「生涯」には、どのように生きるかという一生の質をなすような「生き方」⁵⁾が含まれて」（上田 1995:26）いるのであり、そうした「生き方」が西田自身の生きた彼固有の生涯を貫き超えて浮かび上がってくるありさまを読み解くことに向けて、上田の眼差しはより一層濃密に注がれていく。こうした眼差しのもと、上田の思考は、西田という個人の人生の歩みと共振しながら、私たちにおける「人間として生きるということ」それ自体が一体どういうことなのかという、基底的な人間学的問いの位相へと歩み入るのである。

「或教授の退職の辞」において、西田自身の生涯の固有性は、「黒板に向って一回転をなしたと云えば、それで私の伝記は尽きるのである」という見事なまでに簡潔な表現でその核心が提示される。と同時に、西田の生涯におけるその固有性の核心は、上田にとって、西田個人を超えて、一人の人間が人間として生きる一生の質の問題と不可分に結びついている。上田は、西田という固有名をもつ一人の生きた人間の具体的で個別的な伝記的事実のなかに、上田をふくめ私たち一人一人の「人間として生きる「生涯」」ということにかかわる問いへと繋がる普遍性を見出すのである。そして、西田の「黒板に向って一回転をなした」という表現に面して、自身の生きた何十年かをこのように語る生き方の質が、如何にして「人間として生きるということ」において可能となるのかを探究しようとするのである。

それにしてもなぜ、西田というある特定の個人の生涯に触れることを機縁として、上田は、「人間として生きるということ」という普遍的な人間学的問題圏へと歩み入ることができるのであろうか。それは、西田個人へと注がれる上田の基本的な眼差しが、種々の個人的条件の違いを超えて、西田と上田が人間としてともにそれを生きている普通の日常の生活感覚に深く根差しているからだと考えられる。そしてこの感覚は、西田と上田のみならず、人間として同じく普通の日常を生きる私たちにも分かちもたれている。上田の人間学的思考は、こうした日常の生活感覚を丁寧に研磨し、そこから紡ぎ出される柔らかさと深さを含みもった言葉遣いを細やかに編み上げて、「人間として生きるということ」にかかわる問いを立てるのである。この観点から、「或教授の退職の辞」を改めて見てみると、そこには伝記的な事実が淡々と語られながら、その一つ一つの出来事に面して生きられた日常における西田の包み隠しのない生活感覚が表白されているように思われる。この小品を上田が繰り返し味読した大きな理由であろう。

こうした日常の生活感覚についてももう少し論を掘り下げる。私たちの朝目覚めてから夜眠りにつくまでの日々慣れ親しい起居寝食を思い描いてみる。朝目覚めておはようという。歯を磨き、洗顔

し、着替えをする。食事を準備し、食卓に着き、食事をすませ、片づけものをする。身繕いをし、行ってきますといて学校や職場に出かける。一日の課題を終え、ただいまといて帰宅する。時には外で遅くまで夕食を楽しむこともあるが、大抵は自宅で寛いだ夜を過ごす。そして、一日を振り返り、明日を思い、明日もまた同じように目覚めることを疑うことなく、おやすみといて眠りにつく。昨日もそのように生きてきたし、今日もまさしくそうであった。明日もまたそうであろう。何の変哲もない、当たり前といえば当たり前極まりない一見穏やかな日常の営みである。

しかし実は、こうした起床から就寝までの、私たちにおける日々の馴染み深い平凡な営みのなかにこそ、「人間として生きるということ」のとてつもない不思議さが横たわっている。すなわち、一日を始める身支度をしながら、三度の食事を摂りながら、通学や通勤の電車で揺られながら、勉学や業務に勤しみながら、休憩時間に週末の予定を相談しながら、帰宅してしばし寛ぎながら、まさに眠りにつこうとしながら、そうしたことのすべてが、根本的に不思議だと感じられてなくなる。「いったい毎日毎日何をしているんだ。何の意味があるんだ」という思いが、密やかにしかし抑え難い強烈さをもって、折に触れ止めどなく私たちに湧き起こってくるのである。

上田が、西田個人の生涯に触れるなかで「人間の生涯ということ」へと問いを深めていくことを原理的に可能にするのは、日常生活における平凡な起居寝食の根底に横たわっているこうした圧倒的なまでの不思議さの感覚であると思われる。省みれば、鷲田が先に「人間の性」として提示した「掃除」や「洗濯」の意味への問いかけも、まさしくこの感覚がもたらしたものとイえるであろう。こうした不思議さとともにある「日常生活」の秘密に気づくなかで、私たちもまた、西田の生涯を貫き超えて「人間の生涯」へと向かう上田に導かれつつ、「人間として生きるということ」をめぐる問題圏のとば口に立つのである。

人間学的関心の変わらぬ核心をなすともいふべき「人間として生きるとはどういうことか」という問いは、私たちの人間としての日常生活そのものへの不思議さの感覚を伴った深い驚きにこそその源泉があると考えられる。次章では、こうした観点から、改めて、冒頭に挙げた上田の問いの一文に立ち戻り、その問いを問いとして立ち現しめた不思議さの感覚を伴う驚きの内実に焦点を当てて、考究を進めたい。

3. 「今ここにこうして人間として生きていること」への驚き

「一人の人間がこの地上で何十年かの生涯を過ごすということは、一体どのようなことであろうか」。冒頭の問いはこうであった。これは、日常的な口語表現とまではいえず、このままの形で私たちが通常それを口にし、耳にし、目にすることも稀な一文ではあろう。しかし一方で、この文意は、それ自体として特段の違和感や困難なく理解できるものでもあろう。そしてまた、この一文を構成している一つ一つの語句も、一見それぞれ極めて平易で簡明なものと受けとめることができる。ここでは、「一人の人間」、「この地上」、「何十年」、「生涯」、「過ごす」という語句が選取りられ、発せられているが、それぞれの語句は、特別な領域の専門用語の類いでは全くない。その意味するところは、何ら難解でも不可解でもないように見える。

要するに、普段の会話で普通に用いられる言葉遣いそのものではないにせよ、ここでは、専門的視点に立った術語を通して初めてその形姿を現すような特別な事象について問われているわけでは

ない。あるいはまた、生活のなかで何か尋常ならざる思いがけない非日常的な出来事や事態が生じたことに面し、喫緊の対応を迫られて問いが発せられているというわけでもない。一般に、ある事柄についての問いは、その事柄への驚きによって生まれるとしても、ここでの問いを生む上田の驚きは、例えば自身の生活を取り巻く家庭や地域や職場、自然や社会、歴史や文化、政治や経済などにかかわる環境の激しく大きな変動といった事態に遭遇してのものではないのである。

もちろん、「或教授の退職の辞」で西田も述べるように、振り返ればどのような平凡な市井の人にも、それ相応の来歴がある。また日々の生活の道程は、必ずしも平坦でなだらかではない。行く手を阻むような険しい山谷がしばしば立ち現れる。そして、ある山は超えて、歩みをさらに前に進めることができ、ある谷は渡れず、歩む道をやむなく変更するということもある。私たちは、「一人の人間として」、「何十年」かの「人生」を「過ごす」なかで、その都度のさまざまな社会的役割をそれぞれに応分に引き受け、あれこれの願いを抱き目標を掲げる。そこには、全うできた役割がある一方で担いきれなかった役割があり、叶えられた願いがある一方で到達できなかった目標がある。役割を全うできたことや願いが叶えられたことについて、私たちは誇りや喜びを感じましょう。担いきれなかった役割や到達できなかった目標について、私たちは省みて課題を検討し、次の機会に活かそうともすることであろう。

しかし、ここで上田が発する問いは、それぞれに文化的背景をもつ特定の歴史的社会に生を享けた私たち一人一人が、その人生を歩む上で、個々の具体的で現実的な諸課題に如何に対処するかといった、いわば「処世」の次元における人生の意味をめぐる問題圏それ自体に照準しているのではない。そうではなくて、そうした「処世」をも含む「何十年」かの年月を「生涯」として「過ごす」ということが、全体としてどのようなことなのかが問われている。つまり、ある人が、「一人の人間」として、「この世」と呼ばれる「この地上」という場所に、気がつけば生を享けて、「生涯」と回顧されることになる「何十年」かの年月を、「過ごす」と言い表される仕方で生きていくということ、こうしたことの総体が、とてつもない不思議さの感覚を伴った驚きをもって、静かにしかしはっきりと問いとして立ち現れてくるのである。

この問いには、客観的な実在として事象を位置づけ、厳格に定義づけられた諸概念の精度や密度、強度や硬度を専ら頼みとして、その事象をどこまでも対象論理的に正確に把握することを目指すような思考とは異質な思考のあり方が生きられている。それはいわば、一見安定した意味基盤の上に成立しているように見える日常の深奥に息づく、底知れぬ不思議さの感覚を、堅牢ではあるが狭隘な合理の枠に強引に収めず、その不思議さの実感のまま、率直な驚きの思いをもって真っ直ぐに述べ表そうとすることに与する思考である⁶⁾。あるいは、「今ここにこうして人間として生きている」というこの現実の直中で、その現実そのものを全体として全身で感得しようとする思考であるともいえよう。この思考は、問いを通じて正解を求めようとするのではなく、問うという営みを含め、「生きるということ」そのものへの不思議さを伴う驚きにどこまでも開かれつつ生きようとするのである。

上にも触れたように、私たちは、日々の生活のなかで、あれこれの具体的現実的な諸課題に直面する。そこには成功があり失敗がある、成就があり頓挫がある。それらはそれぞれに、有形無形の社会的経済的利益や損失を私たちの実生活にもたらす。そして、そうした利益や損失によって、私たちの日々の暮らし向きは現に浮きまた沈むのであるから、具体的現実的な生活上の諸課題に面しての成功と失敗、成就と頓挫は、私たちがこの地上に生き、世に処する上で、決して軽々しいこと

でも、些末なことでもない。しかしながら同時にまた私たちは、このような暮らし向きの浮き沈みが、「今ここにこうして人間として生きていること」のすべてではないということ直観しているのではないか。

「一人の人間がこの地上で何十年かの生涯を過ごすということは、一体どのようなことであろうか」。専門用語に拠らず、日常の生活感覚に寄り添うような言葉遣いで掲げられたこの問いは、私たちが上のような成功と失敗、成就と頓挫にまみれた日々の営みの直中であって、自らを省み、もの思うたび毎に、「生きるということ」の奥底から頭をもたげ我が身に押し寄せてくることをやめない。それは寄せては返し、返しては寄せながらも、決して消滅することがない。こうした問いに臨んでもなお、「承認欲求の充足」や「社会的役割の自覚と遂行」、「自己実現」や「生きがいの追求」といった知見の圏内で、「生きることの意味」への希求に収まりをつけようとする生き方は、一見揺るぎない確信のもと、健やかで安定した基盤に立って、私たちの「人間として生きるということ」を支えるように見えるが、その実、度し難く深いまどろみの内にあるといわざるを得ない。上田は、丹念に編み上げられた柔らかく易しい言葉遣いを通して、こうしたまどろみをその根底から揺さぶり続ける。そして、実生活上の「处世」について語り交わされる次元はもとより、心理社会的なアイデンティティや発達課題が議論される次元をも突破して、「生きるということ」そのものの在処へと私たちに誘うのである。

「今ここにこうして人間として生きている」という、圧倒的なまでに何の変哲もなく平凡極まりないと思われる事態こそが、底知れぬ不思議さを湛えているのであり、私たちにとってあらゆる驚きの根源である。「我々の最も平凡な日常の生活が何であるかを最も深く掴むことに依って最も深い哲学が生れるのである」(西田 1979c: 267-268)。私たちは、この西田の言葉に鼓舞されて、また、専門用語ではない平明な言葉を携えて、日常を生きるということの奥底へと専心していく上田ならではの人間学的思考に促されて、次章では「生きるということ」そのものの在処へ歩み入り、そこに息づくものの実相に迫りたく思う。

4. 「生きるということ」の根源力としての「いのち」への目覚め

ここまでは、人間を「生きながら、その生きていることの意味を考えずにはいられない生きもの」と捉える視点から、西田の生涯に触れて上田が指し示した「一人の人間がこの地上で何十年かの生涯を過ごすということは、一体どのようなことであろうか」という問いをめぐる議論を進めてきた。上田のこの問いは、硬質な専門用語とは無縁の柔らかく易しい言葉遣いから成り立っているが、その根底には、私たちが共有する朝目覚めてから夜眠りにつくまでの日常の平凡な営みへの濃密な人間学的眼差しと、その眼差しによって丁寧に研磨された不思議さの感覚を伴った驚きがあった。この不思議さの感覚と驚きを通して、私たちは、日々の起居寝食の奥底で一体何と出会い何を感得しているのか。改めて考えてみる。

目覚めることと眠ること、衣服を着ることと脱ぐこと、食べることと排泄すること、働くことと憩うこと、立つことと座ること、走ることと歩くこと、思いつくままに挙げられるこれらの日常的営みは、その一つ一つがすべて、私たちが「生きていること」の証しである。しかし、さらに問えば、これらの営みによって証しされる「生きていること」そのものは具体的にどのようなイメージで

捉えられているのであろうか。これらの営みを共通に貫いているのは、「勢いを伴う動き」とでもいえるものであると思われる。ただし、「勢い」といい「動き」といっても、必ずしも強く激しく躍動したり突進したりするのではない。例えば「眠ること」、「憩うこと」、「座ること」などは、それ自体としてはむしろ平穏で静謐な営みである。しかしその静謐さのなかに、「生きていること」のしなやかで柔らかな「勢い」と「動き」が感じ取れるのである。

総じて、このような起居寝食に面しての不思議さの感覚と驚きを通して出会い感得されるのは、生きものを生きものとして生かしている根本的な力、原動力とでも言うべきものが働いているというイメージであろう。私たちが目覚めるときも眠るときも、私たちを目覚めさせる力、眠らせる力がそこに働いているのである。そして、生きとし生けるものにおける「生きるということ」の根源に働くこうした力は、一般に、やまとことばで「いのち」⁷⁾と呼ばれてきた。すなわち、「生きていること」とは、そこに「いのちが働いていること」と受けとめられてきたのである。

「いのち」もまた、専門的な術語ではなく、私たちの日常生活感覚のなかに根づいている言葉であるが、上田は、「生きるということ」を示す言葉としての「いのち」について次のように述べる。

「日本語を手がかりにしてみると、生きるということを示す言葉が種々ある。たとえば「生命」という言葉がある。それから、生活あるいは人生というときに使う「生」という言葉がある。それからもうひとつ、「いのち」という言葉もある」(上田 2002a:308)。

上田はこれらの三つの言葉の違いは、「生きる、あるいは生きていることをどのように自覚しているか、その自覚の異なったあり方が異なった言葉のなかに表れている」(上田 2002a:308)とし、この三つはそれを扱う学問との関係でみると、その質の違いが鮮明になるという。生物一般に通じる自然現象としての「生命」は生命科学が扱い、「生」とは文化によって形作られる「生活」や「人生」として、際だって人間的な「生」のことであり、「生の哲学」が扱う。これに対して「いのち」とは、よく私たちが「物のいのち」とか、「仏のいのち」と言うように、生物的な「生命」とも、また人間的文化的な「生」ともその質を異にした根元的な「いのち」と考えることができる」(上田 2002a:308)⁸⁾。「いのち」の相のもとでは、「物」も「仏」も「いのち」ある生きた存在なのである。

上田によれば、このような「いのち」にはそれを直接に対象として扱う学問はない。「対象化することでは触れられないところで営まれているのが「いのち」だからである」(上田 2002a:309)。そうした対象化できない「いのち」が、私たちの「生きていること」の最も深いところで、「生きることの意味」を問うという生き方とは異なるあり方で息づいている。「息づいている」というが、それは小論の冒頭で触れた生物学的な視点から捉えられた心臓の拍動と肺の呼吸に代表されるような生命活動のことではない。私たちが、心肺の生命活動を認識しつつ同時に心肺をしてそのように倦むことなく活動させ続ける根源的な何かに思いが及ぶとき、そこに働きとしての「いのち」が感得されているのである。その感得においては、拍動も呼吸も、生命活動から生じる「音」では既になく、私たちに働く「いのち」が発する「声」であり、語る「言葉」である。

「いのち」は、人間を含むあらゆる生きものの「生きるということ」を貫いて働いている。「いのち」は、「生きるということ」のすべての営みがそれを源として立ち現れてくるような根本的な力であり、私たちがそこから生まれ来り、そこにおいて生まれ、そこにおいて老い病み、そこにおいて死んでいく、生死の根本的なよりどころであり、いわば、「生きるということ」の永遠の故郷である。

「いのち」そのものは、物理的実在ではなく見えも触れもしないが、私たちは、日々の平凡な営みの不思議さに打たれ、起居寢食の一つ一つに深く驚くなかで、人間としてのこの私における「いのち」に目覚め、「生きるということ」が「いのち」の働きとしてあることを自覚していくのである。この自覚においては、「生きるということ」の本義は、「生きることの意味」を問い求めることであるよりもむしろ、「いのち」がその働きにおいて発する言葉に耳を澄ませ、その時その場における「いのち」の求めに応えることであろう。「いのち」は、「いのち」の言葉によって目覚めしめられる」（上田 2002a : 309）のである。

こうして、「生きることの意味を問う」という営みは、「生きるということ」そのものの在処で「いのち」の働きと出会い、「いのち」の言葉の感得とそれへの応答を通じて、「いのちへの目覚めを生きる」という生き方へと開かれていく。そして「いのち」が、やがて死すべき私たちの、この世における「生きるということ」を貫いて働く力である限り、今朝溢れる喜びとともに家族に迎え入れられた赤ちゃんの産声や、昨夜為す術のない哀惜とともに親しい人々に看取られて逝った人の最期の一息においても、「いのち」の言葉は発せられ感得されるのであろう。とすれば、この「いのちへの目覚め」はまた、死へと向かう私たちにおける「いのちの有限性への目覚め」であり、世話し世話される、看取り看取られる「かかわりのもとにあるいのちへの目覚め」でもある⁹⁾。

5. 「生きる」から「いのち」へ —むすびにかえて—

小論は、「生きることの意味」への問いを抱え込んだ人間の生き方を捉え直し、「人間として生きるということ」の実相を、「いのち」の視点に見出すための人間学的試論であった。

まず、「生きることの意味」をめぐる、西田という個人の生涯を手がかりにしつつ、西田を貫き超えて「一人の人間がこの地上で何十年かの生涯を過ごすということは、一体どのようなことであろうか」と問う上田の思考の人間学的特徴を探った。その探究を通して、「生きることの意味」への問いが、日常の営みへの不思議さの感覚に根差していることを見出した。さらに、その不思議さの感覚の真髄は、何の変哲もない日常的な起居寢食への深い驚きであることが明らかになった。そして、この驚きとともに感得される、私たちの「生きるということ」をその根源から駆動する力こそが「いのち」であった。「生きることの意味」への問いは、日常における起居寢食への不思議さの感覚と驚きを通して、「いのち」の働きと出会う。私たちは、こうした「いのち」との出会いの地平において、「生きることの意味」を問うという生き方自体を、改めて問い直す可能性へと導き入れられたのである。

「生きることの意味」を問うことは、確答を求めないにせよ、思考を通じて、「生きることの意味」に人間が意志的にかかわろうとすることである。それは詰まるところ、「生きるということ」の総体をも人間の主体的な営みとして捉えようとするをもたらずであろう。「私たちは眠りたいと欲するから眠る、食べたいと思うから食べるのだ」というのは、「生きることの意味」を主体的に求める生き方に立つ主張である。ここでは、意味を求め意味を問いつつ生きる主体は、あくまでも私たち自身である。それに対して、眠り、食べるという日常の起居寢食が、「いのち」の相のもとに見られるとき、それらは、原理的にいえば、人間としての私たちの主体的な意志的行為ではない。私たちをして眠ろうとさせるもの、私たちをして食べることへと向かわせるものが、「生きるということ」

を駆動する根源的な力として私たちを生かしている、というのが「いのち」の立場であった。その意味で、生きる主体は私たちではない。私たちは、私たち自身によって生きているのではなく、「いのち」の働きによって生かされているのである。

私たち人間にとって、「生きるということはどういうことか」とは依然として、切実な問いである。しかし、「いのち」への目覚めを通して、この問いは、問いとしての切実さを損なわないまま、その主体性の軛と重圧から逃れ、「いのち」のなかへと解き放たれる。こうして私たちは、日常の営みの不思議さを受け取り直し、そこに働く「いのち」の声に聴従しつつ、改めて起居寝食の一つ一つを丁寧に生き直し始めるのである。「生きるということはどういうことか」。それは日々の平凡な生活のなかに、「いのち」の働きとして、今この瞬間も常に自ずと証しされ続けている。

註

- 1) この著書『西田幾多郎 一人間の生涯ということ』は、もと岩波書店刊行の「同時代ライブラリー」の一書として書き下ろされたが、後に全11巻からなる著作集『上田閑照集』(2001-03)の第1巻に収められ、その際「あとがき」は割愛された。しかしながら、小論の問題意識にとって、この「あとがき」の内容は重要であるので、引用はすべて「同時代ライブラリー」版の単行本から行った。ただし小論中、この著書以外の上田の作品の引用・参照は、最終的に上記著作集に所収されたものについては基本的に著作集からとした。また、末尾の文献表に当該作品の初出年を括弧書きで加えた。
- 2) 小品ながら、「或教授の退職の辞」への上田の思いは深く、著作集第10巻の「後語 私とは何か」でも「生涯」という言葉への特別な関心の機縁に触れるなかで、改めてこの作品について「気持ちの起伏にまかせて折々にくりかえし読んだ」(上田 2002c: 393)と述懐している。
- 3) 以下、西田の作品からの引用は『西田幾多郎全集』全19巻(1978-80)によるが、末尾の文献表には当該作品の初出年を括弧書きで加えた。また、引用に際しては、旧字体と旧仮名遣いを、それぞれ新字体と新仮名遣いに改めた。
- 4) 上田は、「或教授の退職の辞」におけるこうした技巧的構成を取り上げ、叙述における人称の転換をめぐる「自己客観化」の問題を軸に、「自己の自己性の構造」についてさらに丁寧な議論を展開している(上田 1995: 31-35)が、小論では立ち入らない。
- 5) この「生き方」に関して、さらに上田は、「世界内でのいわゆる処世術というようなものとは次元を異にした、またその時々の内面的な心境のようなものとも違う、「生きる」ということの総体への一つの決着を含んだ「生き方」、「死に方」と一つであるところの「生き方」(上田 1995: 26-27)であるとし、それを「境涯」という言葉で表す。そしてこうした「一生の質をなすような生き方」を含む生涯には、「ただ一生というのではなく、自覚的な生き方から出てくる「境涯」の意味がこめられて」(上田 1995: 30)いるという。
- 6) こうした何気ない日常の奥底に潜む不思議さを、柔らかな言葉で、その不思議さのまま差し出す上田の人間学的思考の特徴を示す小さな佳品は数多い。ここでは、滞在したホテルの食堂の窓際で朝食を摂り、眼下を眺めながら「ここはどこか。私が居るこの世はどのようなところか」と問う一文に始まり、「この世ならざるもの」の在処へと思いを致した「この世」ということ(上田 2002b)と自宅の庭の楠との間に交わされる朝の挨拶と抱擁、そして夜、同じ庭で流れ星と出会った僥倖を語った「楠の神様」と流れ星(上田 2007a)のみ挙げる。
- 7) 辞典で「いのち」の項目をみてみると、概ね語義の第一に挙げられるのは、人間を含む生きものの生存にとって「もとなる力」、「生命力」、「原動力」、「根源的な力」などである。それに続いて、「寿命」、「生涯」、「天命」、「真髓」、「唯一のよりどころ」といった語義が列挙されるが、総じて、「いのち」という語の語義の核心は、「生きものを生かしめる根源的な力」と捉えられているといえよう。

主な辞典における「いのち」の語義・語釈の要点と語源の解説を挙げておく。

まず、浩瀚で詳細な国語辞典である『日本国語大辞典』では、語義として、①人間や生物が生存するためのもの力となるもの。生命。また、寿命。②生涯。一生。生きている間。③運命。天命。④唯一のた

のみ。唯一のよりどころ。⑤そのもの独特のよさ。真髓。また、一番大切なもの。⑥男女心中の入れ墨の文字。多く遊里に行なわれた習慣で、相愛の男女が互いに二の腕へ「命」の一字、または「誰々命」と入れ墨して、二世も三世もと誓った、といった説明がなされている。

語源に関しては、①イノウチ（息内）、イノチ（気内）。またイキノウチ（息内）の約。②イキノウチ（生内）の約。③イノチ（息路）。④イノチ（息続）。⑤イキネウチ（生性内）の約。⑥イノキ（胃気）の転声。⑦イノチ（息力）。⑧イノチ（生霊）、イノチ（息霊）などの諸説が列挙されている。

『広辞苑』では①生物の生きていく原動力。生命力。②寿命。③一生。生涯。④もっとも大切なもの。命ほどに大切に思うもの。真髓、とある。

個性的な視点からの語釈で知られる『新明解国語辞典』によれば、「いのち」は、生物が生きている限り持続している肉体や精神の活動を支える根源の包括的な呼称、と概括された上で、「一瞬一瞬生きることの繰返しとしてとらえられる緊張の持続であり、客観的には有限であるものが、主体的には無限の連続として受け取られる所に、その特徴が有る」と補説される。

次に、古語辞典でみると、『角川古語大辞典』では、「ち」は霊の意かとした上で、①生存の根元の霊力。生命。寿命。②唯一の頼みとしているところ。それによって生きる力を支えている頼り。③最も肝心のところ。④近世、主として遊里での習慣に、心中立ての一法として、男女が二の腕に相思の者の名を入れ墨するに際し、人名の下に命の字を入れ、「吉さま命」とか「お七命」とか記した。最愛の者、の意による、とされる。

『岩波古語辞典』では、「イは息。チは勢力。したがって、「息の勢い」が原義」とされる。続けて、「古代人は、生きる根源の力を眼に見えない勢いのはたらきと見たらしい。だからイノチも、決められた運命・寿命・生涯・一生と解すべきものが少なくない」とやや踏み込んで語釈したのち、①生命力。②寿命。③一生。生涯。④運命。⑤死期、といった語義が挙げられる。

大野晋独自の編集方針が特徴的な『古典基礎語辞典』では、①人間や生物が生きていくための根源的な力。生命力。②生命の存続する期間。寿命。定命。③運命。天命。④死期。臨終。寿命には必ず終末があるところからいう。⑤唯一のよりどころ。頼みとなるもの。イノチは大切であることからいう、と記される。さらに語源に関する解説では、「イは息。ノは格助詞。チはイカヅチ（雷）やヲロチ（大蛇）のチと同じで、霊力の意。イノチは霊力を表し、自然物のもつ息（=生）の力の意か」とされている。

漢字学の泰斗白川静の古語辞典『字訓』では、まず、「生の霊」の意であろうとした上で、「い」は「生き」「息吹き」の「い」。生命の直接的なあかしの息吹きを以て、生命の義とする。それは各民族語の間で共通する観念で、spirit や animal は、みな「いきするもの」を意味した」と説明される。

また、辞典ではないが、万葉学の第一人者といえる中西進も、著書『ひらがなでよめばわかる日本語』で、「いのち」に含まれている「い」の荘厳性と「ち」の霊格性を指摘し、「いのち」は「忌（斎）の霊」という表記がふさわしい「忌み尊ぶべき霊格」（中西 2003：85）であると述べる。

かつて私は、別稿で、人間における「いのち」について、「私たちの生命や生活や生といった次元と、生物的、社会的、歴史的、さらには文化的、道徳的、宗教的といった位相とを全て包含する視野のもとに見出される、人間として私たちが生きていることの一部始終」（鳶野 2016b：16）という捉え方を示したことがある。今回の捉え方は、そこに、「生きるということ」を根源的に駆動する「力」のイメージを加え重ねたものである。

8) 「生命」「生」「いのち」という生きる三つの質の連関」（上田 2002a：312）をはじめ、「いのち」を主題にした上田の議論で、小論の問題意識にとって興味深いものが他にもあるが（上田 2002d、2007b）、今回は取り上げるに至らなかった。

9) 今回の小論では、生まれ、育ち、老い、病み、死に逝くといった生涯の歩みにおける「いのち」の時間的変容や、生む－生まれる、育てる－育つ、世話する－世話される、介護する－介護される、看取る－看取られる、死ぬ－死なれるといったかわりにおける「いのち」の関係的変容をめぐる問題には触れることができなかつた。しかしながら、「いのち」に焦点づけられる人間学的研究にとって、これらは「いのち」における「一回性」や「かけがえのなさ」や「かなしみ」といった極めて重要なテーマと緊密に結びつくものである。これらの諸問題の一部に関しては、不十分ながらこれまで幾度か論じてきた（鳶野 2012、2016a、2016b、2017a、2017b、2018、2020）。参照願えれば幸いである。

文献

- 上田閑照 1995 『西田幾多郎 -人間の生涯ということ-』 岩波書店(後に上田閑照 2001『上田閑照集』第1巻 岩波書店 に所収)
- 2002a (1997) 「生命/生/いのち」『上田閑照集』第10巻 岩波書店
- 2002b (1999) 「「この世」ということ」『上田閑照集』第10巻 岩波書店
- 2002c 「後語 私とは何か」『上田閑照集』第10巻 岩波書店
- 2002d (1993) 「宗教とは何か」『上田閑照集』第11巻 岩波書店
- 2007a (2003) 「「楠の神様」と流れ星」『哲学コレクションI 宗教』岩波書店
- 2007b (2006) 「宗教とは何か」『哲学コレクションI 宗教』岩波書店
- 大野晋編 2011 『古典基礎語辞典』 角川学芸出版
- 大野晋・佐竹昭広・前田金五郎編 1990 『岩波古語辞典』(補訂版) 岩波書店
- 白川静 1995 『古語辞典 字訓』(普及版) 平凡社
- 新村出編 2018 『広辞苑』(第7版) 岩波書店
- 鳶野克己 2012 「「生きることのかなしみ」という力 -かなしみの教育人間学に向けて-」田中毎実編『教育人間学 -臨床と超越-』 東京大学出版会
- 2016a 「「かけがえがない」とはどういうことか -「別離」の教育人間学試論-」鳶野克己編『人間を生きるということ -「体験」の教育人間学に向けて-』 文理閣
- 2016b 「あがる産声/ひきとられる息 -教育における超越への扉-」『教育哲学研究』第113号
- 2017a 「「生きることのかなしみ」再考」『教育哲学研究』第115号
- 2017b 「「いのち」をかなしむ -道德教育の基盤への一視点-」田中耕治編『教職教養講座第6巻 道德教育』協同出版
- 2018 「この世ではないどこかを、この世において思うということ -「いのちへの世話」をめぐる教育人間学の一素描-」『教育学研究』第85巻第1号
- 2020 「「生きることのかなしみ」に目覚める -教育人間学は教育の本質をどのように語るか-」『教師教育研究』第32号 東信堂
- 中西進 2008 『ひらがなでよめばわかる日本語』 新潮社
- 中村幸彦・岡見正雄・阪倉篤義編 1982 『角川古語大辞典』第1巻 角川書店
- 西田幾多郎 1979a (1934) 「現実の世界の論理的構造」『西田幾多郎全集』第7巻 岩波書店
- 1979b (1929) 「或教授の退職の辞」『西田幾多郎全集』第12巻 岩波書店
- 1979c (1937) 「歴史的な身体(信濃哲学会のための講演)」『西田幾多郎全集』第14巻 岩波書店
- 日本国語大辞典刊行会編 1973 『日本国語大辞典』第2巻 小学館
- 山田忠雄主幹 柴田武・酒井憲二・倉持保男・山田明雄編 2005 『新明解国語辞典』(第6版 机上版) 三省堂
- 鷺田清一 2002 『死なないでいる理由』 小学館

(本学文学部教授)